

風土と人が書かせた曲

沖縄の40年

表現者たち ④

沖縄県南東部の中城湾に臨むサトウキビ畑の真ん中に白亜の建物が立つ。南城市文化センター・シユガーホール。作曲家で琉球大教授の中村透さん(65)はこの沖縄初の公立音楽専用ホールとともに歩んできた。

1994年の開館時から芸術監督。6年前に退いた後も企画の助言を続ける。元々、地域には舞踊や三線といった伝統芸能をたしなむ人が多い。ホールも、それらの担い手の交流の場として構想されていた。

だが、中村さんらは「外

へ開かれたホール」をめざした。「市民と双方向の創造」「全国レベルの演奏家の発掘」を掲げ、市民参加のミュージカルや今年18回目となる新人演奏会オーディションなどを展開した。

北海道出身。東京の音大大学院を修了後、財団に勤めたが、出張の連続で作曲も出来ない。恩師の勧めも

あり、75年、復帰直後の沖縄で琉球大講師になった。

鹿兒島からフェリーで渡った時の体験は鮮烈だった。船上で流れた聞き慣れない沖縄民謡。自分には異境の音楽だった。「遠くまで来たど、めまいがするよ

うな異邦人感覚に陥った」復帰3年の沖縄は海洋博の最中。ビルや道路の建設



「ホールから巣立った優秀な音楽家が演奏をしに来てくれることがうれしい」と話す中村透さん＝沖縄県南城市、藤本彦さん撮影

ラッシュの一方で、米兵が闊歩し、米軍機の爆音が響く。広大な基地にへばりつくように暮らしていた。

「ここは日本であって、日本ではない」と痛感。自らの曲作りのために「南の楽園」を求めた自分を「不純だ」と思った。

自分の立つ位置を探しあぐねていたとき、二つの出来事が中村さんを大きく揺さぶった。

一つは「1フィート運動」。米国にある沖縄戦フィルムを1人13分(約100円)のカンパで買い取り、編集・上映する。依頼され、「沖縄戦 未来への証言」の作曲・編曲を担当した。ラッシュフィルムに写った地上戦の惨状に言葉を失った。

もう一つは島唄だ。粟国島での「七月節」。唄者の老婆は「お盆にしか歌わない」と決った。戦争で失った息子を呼び返す唄だった。

た。「年に一度だけ、生者の魂と死者の魂が命がけて語り合う。そんな唄がある」とは考えてもみなかった。

この土地と人々の生活に根ざした曲作りを……。そう思い直し、島々を巡った。「キジムナー時を翔ける」「モーイのどんち」……

出会った沖縄の調べの数々は、形を変え、曲に結実していった。

在住40年近い。今でも「私の曲」というより、沖縄の人と風土が書かせたもの思いが強い。一方で「沖縄のアイデンティティーを大切にするあまりの伝統音楽の内向き姿勢」も感じ取る。シユガーホールの運営にかかわったのも「未来志向」が必要だと考えたからだ。

琉球大教授を今春、定年退職する。「本土へ戻らないのか」という声を聞き流し、沖縄と共鳴し続ける。

(島唐達也)

＝おわり